

サウンドデザイン演習 (女子美術大学)

【講義4】絶対王政・激情・オペラ

～ バロックの音楽 (1600-1750)

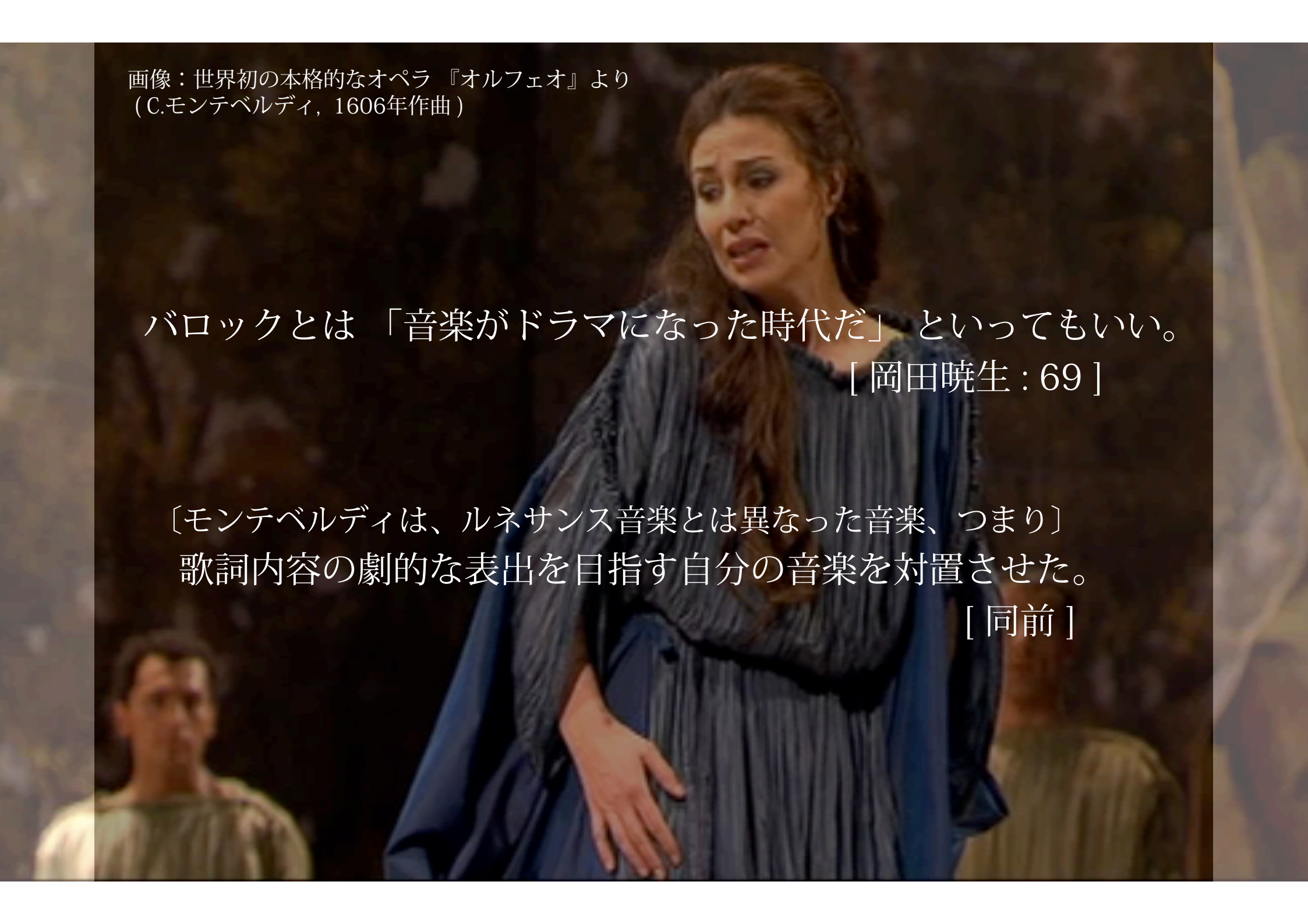
講義担当: 石井拓洋

ishii05042@venus.joshiu.ac.jp

2014

画像：世界初の本格的なオペラ『オルフェオ』より
(C.モンテベルディ, 1606年作曲)

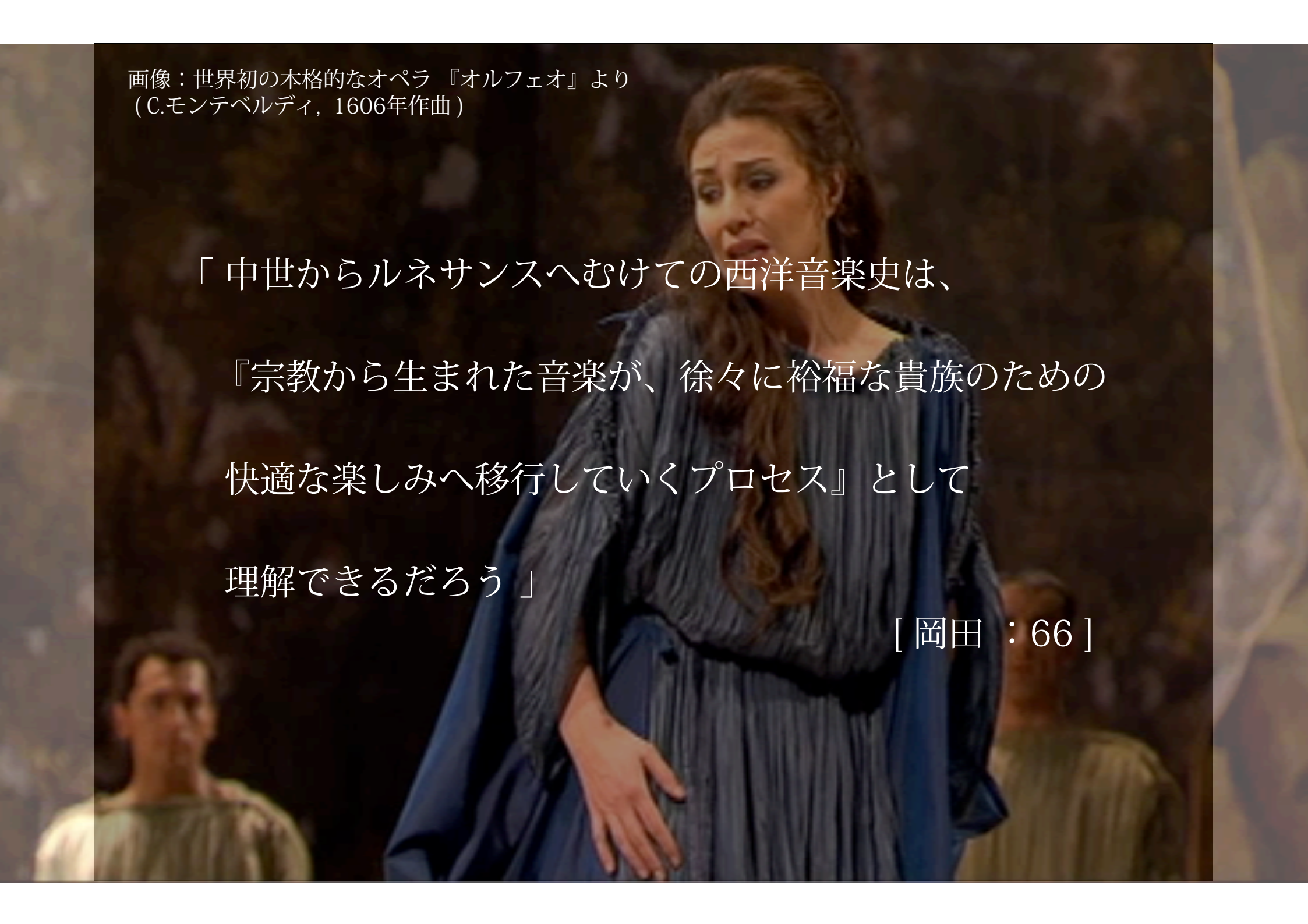


A woman with long brown hair, wearing a blue, pleated, long-sleeved dress, is performing on stage. She has a dramatic expression, looking slightly to her left. The background is dark and out of focus, showing other people in period costumes.

画像：世界初の本格的なオペラ『オルフェオ』より
(C.モンテベルディ, 1606年作曲)

バロックとは「音楽がドラマになった時代だ」といってもいい。
[岡田暁生：69]

[モンテベルディは、ルネサンス音楽とは異なった音楽、つまり]
歌詞内容の劇的な表出を目指す自分の音楽を対置させた。
[同前]

A woman with long brown hair, wearing a blue, pleated, long-sleeved dress, is performing in an opera house. She has a concerned or emotional expression on her face. The background is dark and filled with the silhouettes of an audience.

画像：世界初の本格的なオペラ『オルフェオ』より
(C.モンテベルディ, 1606年作曲)

「中世からルネサンスへむけての西洋音楽史は、
『宗教から生まれた音楽が、徐々に裕福な貴族のための
快適な楽しみへ移行していくプロセス』として
理解できるだろう」

[岡田：66]

バロックの音楽の時代背景

- 時代 (1600-1750)
 - ルネサンス音楽(1200頃-1600頃) のあと。
- 政治的背景 = 「絶対主義」
 - 16C-18Cのヨーロッパ
 - 国王が行政・司法・軍事等を、誰の制約も受けず行使する政治体制
 - オーストリア「ハプスブルグ朝」 (マリー・アントワネットの実家)
 - フランス 「ブルボン朝」 (ルイ14世 太陽王 在位 1643-1715)
 - ロシア 「ロマノフ朝」
 - イギリス 「チューダー朝」

バロックの音楽の時代背景

- 絶対王政の背景

- 「王権神授説」 [松宮 : 79]

- 神から王権を付託されたとする考え。これに基づいて
国王はローマ教皇の権威から独立し、人民を支配した。

新約聖書「ローマの信徒への手紙」第13章

(絶対王政の理論的根拠の一つといわれる)

「人は皆、上に立つ権威に従うべきです、**今ある権威はすべて神によって立てられたもの**だからです。従って、権威に逆らう者は、神の定めに背くことになり、背く者は自分の身に裁きを招くでしょう」

バロックの音楽の時代背景

- ・ 場所 → イタリア (フィレンツェ, ローマ, ナポリ)



ドイツ圏 (ザクセン, ウィーン)

- ・ 「バロック」 *baroque* の 美意識

- バロック とは「いびつな真珠」の意味
- ルネサンスと比較して「美術の趣味が悪い」という否定的な語
- ルネサンス (調和の美) ⇔ バロック (劇的な美)

イタリア・バロック美術の代表
ベルニーニ 彫刻と建築 『聖女テレサの法悦』 (1645-1652)



イタリア・バロック美術の代表
ベルニーニ 彫刻と建築 『聖女テレサの法悦』 (1645-1652)



イタリア・バロック美術の代表
ベルニーニ 彫刻と建築 『サン・ピエトロ大聖堂前の列柱廊』 (1607-1615)



バロックの音楽

Q.

バロックの音楽を代表する作曲家といえば？

バロックの音楽

A . (想定される模範的解答)

J.S.バッハ、Johann Sebastian Bach (1685-1750)

バロックの音楽

J.S.バッハ Johann Sebastian Bach (1685-1750)



🔊 《マタイ受難曲》 BWV 244 - 第1曲 合唱「来たれ、娘たちよ、我と共に嘆け」

🔊 《2つのヴァイオリンのための協奏曲 二短調》 BWV1043 「第1楽章」

バロックの音楽

G.F.ヘンデル Georg Friedrich Händel (1685-1759)



【試聴】

《オンブラ・マイ・フ》 Ombra mai fù (1737) 歌：キャスリーン・バトル Kathleen Battle (ソプラノ)

<https://www.youtube.com/watch?v=sAE8dAqAiZE>

ソプラノ歌手キャスリーン・バトルが歌ったこの曲は 1986年の「スーパーニッカ」CM で 使用されて大反響をえた。
ちなみに映像の演出は、ウルトラマンシリーズで有名な 映画監督・実相寺昭雄氏

バロックの音楽

A . (想定される模範的解答)

J.S.バッハ Johann Sebastian Bach (1685-1750)

or

G.F.ヘンデル Georg Friedrich Händel (1685-1759)

バロックの音楽

A .

J.S.バッハ？

もちろん、バッハらは
この時代において無視出
来ない優れた作品を残した。

一方、、、

バロックの音楽

A .

J.S.バッハ？

この時代の音楽様式を
特徴づけるという点では

必ずしも
「典型的な作曲家」
とは言い難い。

時代様式がとらえにくい バロック音楽

「バロック音楽史の見取り図をややこしくしているのは、
バッハという『時代の最も偉大な作曲家』が
必ずしも文句無しに『時代の最も典型的な作曲家』
とはいえない点にある」 [岡田：85]

「バッハのイメージでバロック全体を代表させるようなことはしない方がいい」。
「バッハは〔※当時すでに〕古風なスタイルになりつつあった」
[岡田：86-87]

それでは、
「バロック音楽」の時代の内実とは？

2つの側面から探るバロック音楽

1. 社会機能的側面
2. 音楽書法的側面

バロック音楽の社会機能的側面

この時代 (16C~18C) の西欧の「社会」とは

「絶対王政」の時代

フランス 「ブルボン朝」

ベルサイユ宮殿



フランス 「ブルボン朝」

ベルサイユ宮殿



フランス 「ブルボン朝」 ベルサイユ宮殿



フランス

「ブルボン朝」


ベルサイユ宮殿



オーストリア 「ハプスブルグ朝」 シェーンブルン宮殿



ハプスブルグ帝国皇帝の離宮。世界遺産。 (ウィーンの名所)



オーストリア 「ハプスブルグ朝」 シェーンブルン宮殿

ハプスブルグ帝国皇帝の離宮。世界遺産。 (ウィーンの名所)



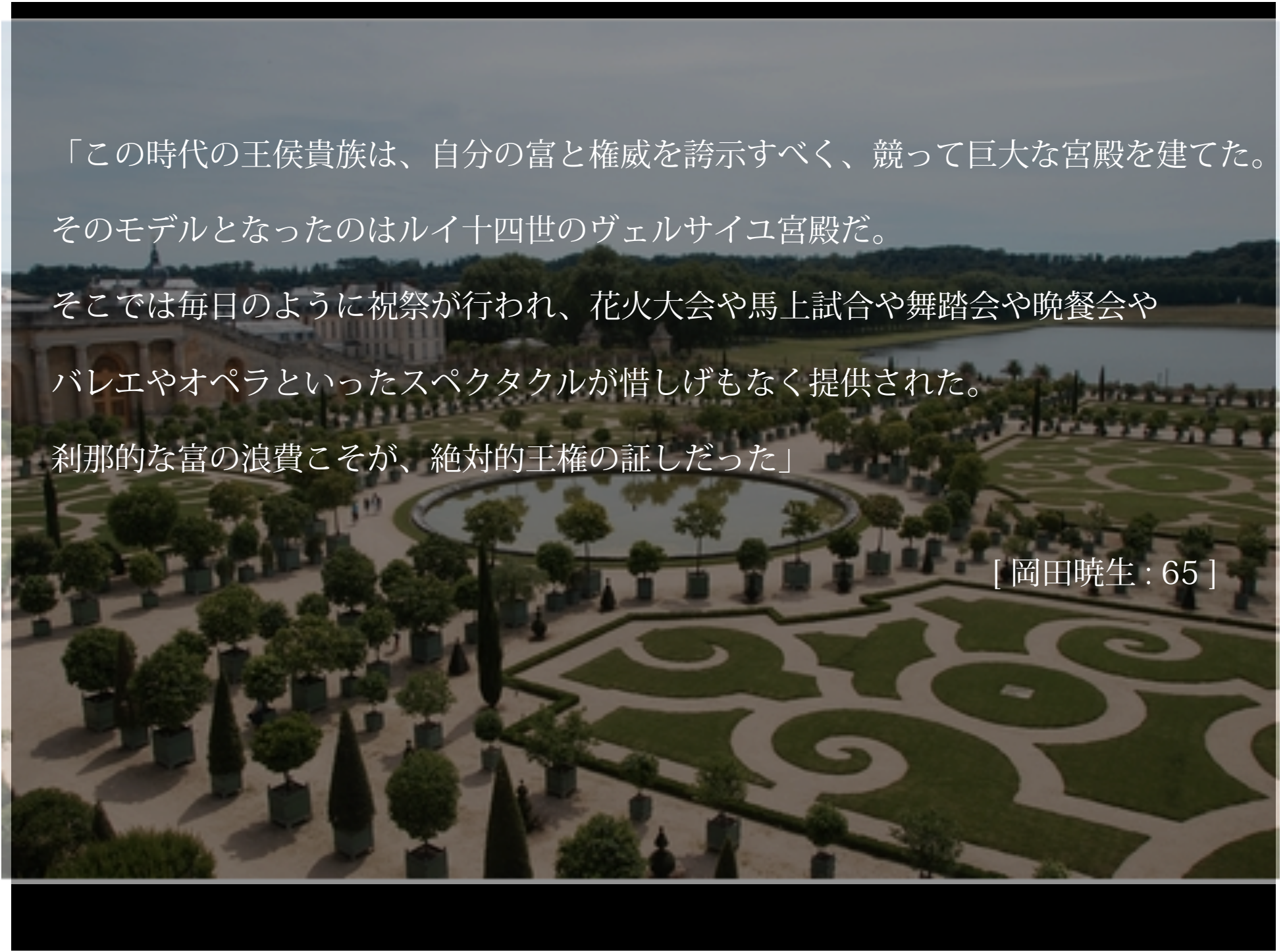
「この時代の王侯貴族は、自分の富と権威を誇示すべく、競って巨大な宮殿を建てた。

そのモデルとなったのはルイ十四世のヴェルサイユ宮殿だ。

そこでは毎日のように祝祭が行われ、花火大会や馬上試合や舞踏会や晩餐会やバレエやオペラといったスペクタクルが惜しげもなく提供された。

刹那的な富の浪費こそが、絶対的王権の証しだった」

[岡田暁生：65]



「『王は願望を述べ、芸術家たちは構想を提出し、役人達は計算し、委員会では協議が行われた。手職人の一隊、大工、画家、仕立屋、庭師、料理人が動員された。

〔中略〕数千人の労働者が10万時間働いた、— それもおそらく一夜のうちに浪費されるためであった』（〔※リヒャルト・アレヴィン『大世界劇場』より〕）」

「花火、衣装、食事、建築、噴水、庭園、芝居、踊りなどと並んで—— こうした壮大な祝祭を演出するために欠かせない小道具の一つが、音楽だったのである」

[岡田暁生：65 - 66]

バロック音楽の社会的機能は第一に

王様を称える音楽

ルイ14世 と 作曲家リュリ



ルイ14世「太陽王」在位 1643-1715
バレエ好きなフランス国王



ルイ14世の宮廷楽長。イタリア生まれ
フランス貴族社会で権勢をほしいままにする



画像：映画『王は踊る』（2000年）より

ルイ14世 Louis XIV (1638 – 1715) ブルボン朝からの第3代目のフランス国王。在位期間 (1643 - 1715) 。
5歳にして国王即位。バレエを奨励し、自らも13歳 (1651年2月) でバレエの初舞台を踏む。15歳のころ、宮廷バレエ『夜』
で初主演 (1653年2月23日) 。そのときに太陽に扮して踊ったことで「太陽王」とよばれる。この公演は、貴族の王室に対する
反乱 (フロンドの乱) を彼が制圧した直後であり、ルイ14世の権力を見せつける機会となり、以後「絶対王政」が始まることになる。

ルイ14世 と 作曲家リュリ

映画 『王は踊る』

(*Le Roi danse* , 2000制作, ジュラルール・コルビオ監督, ベルギー)

- 作曲家リュリの生涯を描いた映画
- 当時の宮廷と音楽との関係がよく描かれている映画
- 1653年に宮廷で自ら「太陽王」に扮して上演した宮廷バレエ『夜』の様子。
- 貴族の反乱(フロンドの乱)を制圧した直後の公演であった。
- 『夜』は彼の権力を誇示する機会となり、以後「絶対王政」が開始される。
- 当時、ルイ14世は15歳。

参考資料 [白石, 1991]

※ ルイ14世は背を高く見せるために「ハイヒール」をはくことを好んだ。映画でそれにちなんだ描写もあり。

映画『王は踊る』(2000年)より(7分程度)



バッハとバロックの関係

ルネサンス = キリストのための音楽

バロック = 王様のための音楽

バッハ = ?

バッハ とバロックの関係

ルネサンス = キリストのための音楽

バロック = 王様のための音楽

バッハ = キリストのための音楽 (旧)
プロテスタント(ルター派)

バロック音楽の音楽書法的側面

バロック音楽の音楽書法的側面

歌詞の内容伝達を重視する音楽

バロック音楽の音楽書法的側面

歌詞の内容伝達を重視する音楽

音楽サークル「カメラータ」 (1600年頃, イタリア・フィレンツェ)

- ルネサンスの流れでギリシャの古典が研究
- 詩と音楽の理想的融合の範 → ギリシャ悲劇
- ギリシャ悲劇の復興を目指した。
- 作曲家 カッチーニ や ガリレイ (ガリレオの父) など

バロック音楽の音楽書法的側面

歌詞の内容伝達を重視する音楽

音楽サークル「カメラータ」 (1600年頃, イタリア・フィレンツェ)

- ルネサンスの流れでギリシャの古典が研究
- 詩と音楽の理想的融合の範 → ギリシャ悲劇
- ギリシャ悲劇の復興を目指した。
- 作曲家 カッチーニ や ガリレイ (ガリレオの父) など

→ 「オペラ」の誕生

バロック音楽の音楽書法的側面

歌詞の内容伝達を重視する音楽

- ルネサンス音楽(対位法の音楽)は

歌詞が聞き取れないからバロックでは嫌われた。

バロック音楽の音楽書法的側面

そこで

バロック音楽の音楽書法的側面

一人の歌手と楽器の伴奏の、
歌詞が聞き取りやすい音楽の形が生まれた

→ 「モノディー様式」

オペラの「レチタティーヴォ」と「アリア」へ

バロック音楽の音楽書法的側面

【聞き比べ】

パレストリーナ（ルネサンス期，対位法様式）



《ミサ・ナシェ・ラ・ジョイア・ミア Missa Nasce La Gioja Mia》 - Kyrie (1590)

A. スカルラッチェイ（バロック期，モノディ様式）



アリア《堇 すみれ》 - 歌劇「ピッコとデメートリオ」より

バロック音楽の音楽書法的側面

【概略】

ルネサンスにおける古典研究



ギリシャ悲劇の復元（フィレンツェの音楽サークル「カメラータ」）



歌と伴奏の形（「モノディー様式」→「レチタティーヴォ」や「アリア」）



感情表現の追求

「オペラ」の誕生

バロック音楽の音楽書法的側面

世界初の本格的オペラ

オペラ『オルフェオ』(1607)

作曲：クラウディオ・モンテベルディ (1567-1643, イタリア)

バロック音楽の音楽書法的側面

世界初の本格的オペラ

オペラ『オルフェオ』(1607) 作曲：モンテベルディ

【あらすじ】

- ・ 古代ギリシャ時代、オルフェオ(男) はエウリディーチェと結婚した
- ・ しかし、妻エウリディーチェは毒蛇にかまれて死ぬ
- ・ 悲しむオルフェオは神に頼んで 天国から妻の奪取を試みる
- ・ 神からの条件は、帰路にて妻の顔を見ないことであった
- ・ しかし、オルフェオは天国からの帰路に妻の顔を見てしまう
- ・ 妻は消えてしまう。
- ・ なので、オルフェオ自身も天国へ行って妻と暮らすことにする。

現代のオーケストラとは異なる 古楽器

中世フィドル

ビオラ・ダ・ガンバ

フィーテル

レベック

レベック

ヴィオラ・ダ・ガンバ



バッハとバロックの関係

ルネサンス(対位法)

バロック(歌と伴奏, モノディー)

バッハ ?

バッハとバロックの関係

ルネサンス(対位法)

バロック(歌と伴奏, モノディー)

バッハ 対位法 (旧)

世界初の音楽学校

世界初の音楽学校

～ イタリアの港町の孤児院

世界初の音楽学校

～ イタリアの港町の孤児院

- ・イタリアの「ナポリ」と「ヴェネチア」に設立。（16C）
- ・2都市は港町。港町には捨て子が多い。
- ・イタリアは、そのような捨て子に、自立の道をつくるために音楽学校をつくり、彼らに教育を与えたという。
- ・ナポリの「ピエタ孤児院」（音楽学校）では、ビバルディが教えていた。
- ・ヴェネチアでは、『董（すみれ）』のA.スカルラッティが教えていた。
- ・優秀な生徒は、イタリア・オペラの歌手としてデビューした。
このような、**孤児の自立のための音楽学校がイタリア・オペラを支えた。**

参考文献

- 松宮秀治 (2008)『芸術崇拜の思想：政教分離とヨーロッパの新しい神』白水社
岡田暁生 (2005)『西洋音楽史』中公新書
ドナルド.H.ヴァン.エス(1970=1986)『西洋音楽史：音楽様式の遺産』新時代社
片桐功・他(1996)『はじめての音楽史』音楽之友社
石井宏 (2004)『反音楽史：さらばベートーヴェン』新潮社
N.アーノンクール(1982=1997)『古学とは何か：言語としての音楽』音楽之友社
白石嘉治 (1991)「踊る王から見る王へ：ルイ14世治下におけるオペラ再興の一断面」
『Les Lettres francaises』11号、上智大学フランス語フランス文学紀要編集委員会

Web「マティアス・ヴェックマン」 (Retrieved 2012-06-11)

<http://www.geocities.co.jp/MusicHall/4053/weckmann.html>